

# サレント方言における不定詞使用について

Sull'uso dell'infinito nei dialetti salentini

田中 慎吾

Shingo TANAKA

## 0. はじめに

一般にイタリアの「長靴のかかと (tacco di stivale)」と呼ばれるプーリア州の南部サレント地方で用いられるサレント方言 (I dialetti salentini) では、泉井 (1968) や秋山 (1992) でも紹介されているように、不定詞の使用は大変限られていると言われる。

(1) \**lu Karlu ole inire krai.* (\*=非文)

art.det 3.sing V-inf

「カルロ」「望む」「来る」「明日」

(2) *lu Karlu ole ku bbene krai* 「カルロは明日来たいと思っている」

art.det 3.sing COMP 3.sing

「カルロ」「望む」「来る」「明日」

(Calabrese (1992), p.267)

こうした状況を指して、Gerhald Rohlfs は論文 *‘La perdita dell’infinito nelle lingue balcaniche e nell’Italia meridionale’* (1972) の中で「不定詞の消失 (perdita dell’infinito)」と呼んだ。ところが、一方で方言テキストに当たってみると、不定詞は思いの外使用されていることが分かる。(Alfredo Romano *“Lu Nanni Orcu”* (2001), p.14, 下線部が不定詞)

“Sì, ca era fessa mo!” li rispundia a ttonu lu Giovanninu, facendu ddivedère ca nu’ llu timia. E ntorna

“Sscindi ca t’aggiu mmangiare! Sscndi ca t’aggiu mmangiare!”

“Sienti, Nanni Orcu, cerca cu tte stai quetu quetu. Ca cce tte pensi? Ca iu su’ cchiù fforte te tie!”

“Comu sarebbe ddire ca si’ cchiù fforte te mie. E fffamme bbisciu comu sinti cchiù fforte!”

以上の短い引用からだけでも、サレント方言において不定詞は「消失」していないように見える。ここから、「不定詞の消失」と実際の不定詞使用の関係についての素朴な疑問が

浮かんでくる。すなわち、サレント方言において不定詞は消失したのか、またそうならばいかなる意味においてだろうか。

本稿では、以上の疑問を出発点とし、「不定詞の消失」概念の再検討、および先行研究の整理を踏まえた上、サレント方言で不定詞使用がどのように受容されるかについて、2005年に行ったアンケート調査に基づいた考察を行いたい。

## 1. 「不定詞の消失」

Rohlf s が用いた「不定詞の消失」は、Sandfeld の *Linguistique balkanique* (1930) をその典拠としている。この研究は、周知のように「バルカン言語同盟」を知らしめるきっかけとなったものであり、ここで問題とする「不定詞の消失」とは、Sandfeld がバルカン言語同盟の条件として挙げる諸特徴の一つである。該当箇所を以下に引用する。

2 EXTINCTION DE L'INFINITIF. – Le deuxième trait marquant des langues balkaniques est le manque complet ou partiel de l'infinitif et son remplacement par des propositions subordonnées.

(Sandfeld (1930), p.173, 下線部引用者)

Sandfeld 自身、「完全な、あるいは部分的な不定詞の消失」と呼んでいることから分かるように、「消失」は必ずしも完全である必要はない。むしろ、Tomić (2004, p.31) によると、この「不定詞の消失」については、マケドニア語のような「不定詞の完全な消失」が見られる言語から、不定詞の使用に何らかの制限がつく言語（ルーマニア語やセルビア・クロアチア語）まで、不定詞消失の段階にバルカン諸言語<sup>1)</sup>の中でも違いが見られるという。

すなわち、「不定詞の消失」という用語は、上記のような説明を必要とするものであり、字句通りにとるだけでは誤解を与える可能性を持っているといえることができる。

Rohlf s がサレント方言について「不定詞の消失」が当てはまるとしたことに對しても、やはりこの用語の持つ問題からか、Calabrese (1992, p.268) はサレント方言の不定詞を扱う際、不定詞は形態論上「消失」してはおらず、むしろ生産的である (… we may conclude that the infinitive is a perfectly alive and productive verbal form in Salentino.) と書かなくてはならなかった。

以上より、「不定詞の消失」とは、①不定詞が形態論上消失している（従って当然使用されることもない）、または②不定詞は形態論上存在するが使用されない傾向がある（傾向の度合いは言語によって異なりがある）、と2つの場合を分けて考えることが必要である。

なお、Rohlf s が論文の中で適用した「不定詞の消失」についてまず付け加えておきたいのだが、Rohlf s はサレント方言において「不定詞の完全な消失」を主張している訳ではない (Rohlf s (1969, p102) では同じ現象を “Impopolarità dell'infinito” と呼んでいることか

らも分かる)。むしろ、サレント方言において *sapere* や *potere*<sup>2)</sup> が不定詞を従えることを指摘し、その内でもとりわけ *potere* が不定詞を従えることを理由に、かえてこれは「不定詞の消失」に一致すると主張しているのである<sup>3)</sup>。ただし、Rohlf s は「不定詞の消失」という現象について述べる際に、サレント方言とバルカン諸言語が平行して不定詞を使用しないケースを指摘することを主とし、一方のサレント方言で使用されている不定詞については、その論旨からして特に取り上げなかったものと推察される。そのため、用語自体が孕む問題も加わって、サレント方言において使用される不定詞までが大変限られているような印象を与えてきたように思われる。本稿は、そこでは言わば注目されなかった不定詞使用について取り上げようとするものである。

## 2. サレント方言とギリシャ語

サレント地方における不定詞使用の制限は、サレント方言における「ギリシャ語法」の一つといわれ、ギリシャ語基層の影響に起因すると言われる。例えば Sobrero (2002, p.105) では、サレント地方でかつて広く用いられていたギリシャ語の構造の名残りと説明している。

サレント方言における「不定詞の消失」の要因については、このようにサレント方言とギリシャ語の歴史的な言語接触によると言われるのだが、サレント方言の不定詞使用を共時的観点から見れば、サレント地方のギリシャ系方言（いわゆる *griko*）<sup>4)</sup> のみならず、バルカン諸言語の研究からも得ることがあるように思う。

また、バルカニズム研究の側からは、「不定詞の消失」についてバルカン諸言語とサレント方言を繋いだ Rohlf s の論は知られてはいるものの、例えばバルカン諸言語の不定詞について広範な研究を行った Joseph (1983) がサレント方言を特別に研究対象としてとりあげていなかったことを考えてみても、Rohlf s の研究を踏まえた上で、不定詞使用についてバルカン諸言語とサレント方言を対照させる研究は今後可能性を持っていると思う。

## 3. 不定詞使用に関する先行研究

サレント方言における不定詞の先行研究としては、Rohlf s (1969, p.104, 1972, p.326)、Calabrese (1992, p.268)、Sobrero (2002, p.104) を取り上げた。以下、表 1 にまとめる。

表 1

Rohlf s	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <i>potere</i> 「可能である」は義務的に不定詞を従える</li> <li>・ <i>sapere</i> 「知る」、<i>sentire</i> 「聞く」、<i>udire</i> 「聞く」、<i>fare</i> 「させる」、<i>lasciare</i> 「させる」は不定詞を従える</li> <li>・ <i>volere</i> 「望む」は完全に明示節を従える</li> </ul>
Calabrese	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ モダリティ動詞・アスペクト動詞、知覚動詞、使役動詞は不定詞を従える</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <i>volere</i> 「望む」、<i>persuadere</i> 「説得する」、<i>credere</i> 「思う」は義務的に明示節を従える</li> </ul>
Sobrero	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 原則的に <i>volere</i> 「望む」、<i>sapere</i> 「知る」、<i>fare</i> 「させる」、<i>lasciare</i> 「させる」は不定詞ではなく、<i>cu</i> を補文標識として明示節を従える</li> <li>・ <i>dovere</i> 「しなくてはいけない」(<i>toccare</i> がなければ)、<i>bisognare</i> 「必要がある」も明示節を従える地域がある</li> <li>・ 南部では他の動詞や構文も明示節を従える (<i>vedere</i> 「見る」、<i>senza</i> 「なしで」など)</li> <li>・ サレント地域の中・南部より北部へ行くにしたがって不定詞の使用は一般化する</li> </ul>

以上の見解では、その研究の方向性に違いはあるものの、挙げている各項目について、それぞれが従えるのは不定詞なのか明示節なのか、という点からの判断をとっている。

ここで、今まで述べてきた「不定詞の消失」を、明示節・非明示節という2つの節の選択という観点から捉え直してみたい。つまり、先に挙げた(1)、(2)を例にとれば、*volere* は非明示節は選択できず、明示節を選択する、と捉えることである<sup>5)</sup>。

このように明示節・非明示節という2つの節を設定した場合、可能性として、どちらかの節のみが選択可能な場合と、その2つともが選択可能である場合の2通りが考えられる。後者である2つの節が両立する場合として、ルーマニア語から1例を取り上げる。

(3) *pot bea* 「私は飲むことができる」

1.sing V-inf

「できる」「飲む」

(4) *pot să beau* 「私は飲むことができる」

1.sing COMP 1.sing

「できる」 「飲む」

(コムリー (1992)、 p.221)

コムリーによれば、ルーマニア語では非明示節である(3)、および明示節である(4)には両立が見られるという(ただし明示節を選択する(4)の方がより「普通」という)。

今までの議論から、サレント方言での先行研究で「不定詞を従える」、あるいは「明示節を従える」といわれる様々なケースについても、一方の節のみが選択可能な場合と、2つの節が両立する場合の2通りが想定できるように思える。そして、(3)と(4)のように、選択可能な2つの節のうちで、どちらかの節の方がより自然度が高い、という場合も想定

できるであろう。

今回はひとまず、ルーマニア語における(3)(4)のような両立状況がサレント方言にも見られるという予測を立て、その観点から先行研究を見直してみる、というのが調査に当たって立てた目標であった。

#### 4. 調査および考察

3. で立てた予測をもとに、2005年8月にサレント方言話者10名<sup>6)</sup>に対してアンケート調査をおこなった。アンケートは、明示節、非明示節をそれぞれ用いた対となる文をサレント方言話者<sup>7)</sup>の協力を得て作成しておき、それぞれの文の許容度を3段階(1 non accettabile (許容不可能)、2 accettabile (許容可能)、3 naturale (自然))で回答頂くという形式をとった。このように、先に明示節と非明示節が対となる文を作成しておくことによって、それぞれの文に対する受容度が調査可能になると考えた。以下が質問形式の1例である。

1 Nu pozzu bire lu mieru.	1	2	3
2 Nu pozzu cu biu lu mieru.	1	2	3

調査項目としては、先行研究で明示節または非明示節を従えたとされた[1]から[5]の10項目を選んだ。使用した文は(5)～(15')である(括弧内にはイタリア語の逐語訳を付けたが、これは調査時には使用していないものである)。

- [1] 補助動詞 (potere 「できる」, sapere 「知る」, volere 「望む」)
- [2] アスペクト動詞 (mettersi a 「始める」, finire di 「終える」)
- [3] 知覚動詞 (sentire 「聞く」, vedere 「見る」)
- [4] 使役動詞 (fare 「させる」, lasciare 「させる」)
- [5] 前置詞 (senza 「～なしで」)

- (5) *Nu pozzu bire lu mieru. (Non posso bere il vino.)*
- (5') *Nu pozzu cu biu lu mieru. (Non posso che bevo il vino.)*
- (6) *Sacciu sciucare a pallone. (So giocare a pallone.)*
- (6') *Sacciu cu sciocu a pallone. (So che gioco a pallone.)*
- (7) *Oju sunare u pianu. (Voglio suonare il piano.)*
- (7') *Oju cu sonu u pianu. (Voglio che suono il piano.)*
- (8) *Me mintu a fare ginnastica. (Mi metto a fare ginnastica.)*
- (8') *Me mintu cu fazzu ginnastica. (Mi metto che faccio la ginnastica.)*
- (9) *A ce ura spiccia de faticare u Marcu osci? (A che ora finisce di lavorare Marco oggi?)*

- (9') *A ce ura spiccia cu fatica u Marcu osci? (A che ora finisce che lavora Marco oggi?)*  
 (10) *Te sentu cuntare 'nu fattu (Ti sento raccontare un fatto.)*  
 (10') *Te sentu ca cunti 'nu fattu (Ti sento che racconti un fatto.)*  
 (11) *T'aggiu vistu passare a via (Ti ho visto passare la strada.)*  
 (11') *T'aggiu vistu ca passavi a via. (Ti ho visto che passavi la strada.)*  
 (12) *Lu fazzu scire a lu mercatu. (Lo faccio andare al mercato.)*  
 (12') *Lu fazzu cu 'bbae a lu mercatu. (Lo faccio che va al mercato.)*  
 (13) *Me lassi cuntare 'nu picca? (Mi lasci parlare un po'?)*  
 (13') *Me lassi cu cuntu 'nu picca? (Mi lasci che parlo un po'?)*  
 (14) *Vai senza portare nienzi? (Vai senza portare niente?)*  
 (14') *Vai senza cu porti nienzi? (Vai senza che porti niente?)*

以上の結果を、節の選択可能性に準じて並べ替えたものが表2である（百分率は小数点2桁以下切り捨て）。

表2

	非のみ	非優先	非/明可能	明優先	明のみ	合計
potere 「できる」 <sup>8)</sup>	7	1	2	0	0	10
fare 「させる」	3	3	3	0	1	10
finire di 「終える」	0	5	5	0	0	10
sentire 「聞く」	0	5	4	0	0	9 <sup>9)</sup>
sapere 「知る」	0	5	4	1	0	10
lasciare 「させる」	0	3	6	1	0	10
vedere 「見る」	0	3	5	1	1	10
mettersi 「始める」	0	1	5	3	1	10
senza 「なしで」	0	0	2	4	4	10
volere 「望む」	0	0	2	2	6	10
合計	10 (10.1%)	26 (26.2%)	38 (38.3%)	12 (12.1%)	13 (13.3%)	99 (100%)

まず、個別の項目の前に各列の合計を見ると、(A) 明示節・非明示節ともに可能である例が最も多く (38.3%)、次に (B) 非明示節を優先する場合 (26.2%) となった。また、(C) 非明示節のみを選択する場合には最も少ない (10.1%) という結果になった。

上で扱われている項目の多くは非明示節をとると言われるものであるから、(B) のように非明示節を優先する場合が相当数を得たのは妥当と言えるが、それにもまして多かったのが (A) の場合である。これは、明示節および非明示節がともに可能とされたということ

であり、2つの節の両立状況を表すものと考えられる。

さらに、どちらかの節が優先される場合まで含めると、回答数が76(77.7%)となり、広い割合において2つの節の選択が認められるという結果になった。

以上から、サレント方言において非明示節と明示節の両立が見られるという予測は妥当なものであったと考えることができるだろう。次に、項目ごとについて見ることにする(それぞれの項目について、最も回答が多かった枠に入れている)。

表3

非明示節のみ	potere「できる」、fare「させる」
非明示節優先	finire di「終える」、sentire「聞く」、sapere「知る」、fare「させる」
非明示節・明示節ともに可能	lasciare「させる」、finire di「終える」、vedere「見る」、mettersi「始める」、fare「させる」
明示節優先	senza「なしで」
明示節のみ	volere「望む」、senza「なしで」

このように、節の選択可能性に準じて各項目を分類していった表を見ると、明示節・非明示節どちらかのみを選択するという回答は、非明示節のみがpotereおよびfare、明示節のみがvolereおよびsenzaになった。これは基本的には先行研究に沿っていると思うが、それらの項目についても両立関係が認められるという回答が見られたことは興味深い。

また、項目ごとに見た場合でもやはり最も多かったのが(A)の両立関係であることが確認できると思う。

以上より、サレント方言においては非明示節と明示節が相当数の場合において両立可能であることが分かったが、ここで改めてサレント方言における「不定詞の消失」について考えてみたい。今回の調査より、サレント方言において非明示節は想定されるよりも広い範囲で使用が認められることがわかるが、もう一方の明示節もやはりまた、使用が認められる範囲が広いと言える。そうだとすれば、不定詞側から見て、使用されないケースを指して「消失」と呼ぶことよりも、非明示節が期待される環境においても明示節の使用が認められる、あるいは優先されることから、「明示節の広がり」とでも呼ぶ方が、節の選択という観点からすればより適切ではないかと思われる。

## 5. おわりに

今回のアンケート調査は10名を対象に行った調査であったため、データとして十分という調査ではないが、それでもサレント方言の不定詞使用に関する捉え方を修正するという観点からすれば有効であったのではないかと思う。

サレント方言において、以上で述べたように明示節・非明示節の両立関係が設定できる

とすれば、次にその使い分けがいかなる要因において行われているか、という観点からの研究の可能性も出てくるように思う。しかし、現状としては、まずは更なる記述的研究が必要となるであろう。

#### 注

本稿は 2008 年 5 月 17 日東京大学における第 46 回日本ロマンス語学会での口頭発表を基に加筆・訂正を加えたものである。発表についてご質問やご意見を下さった先生方に感謝いたします。

- 1) ここでは特に説明を加えず「バルカン諸言語」という用語を用いたが、実は「バルカン言語同盟」に含まれるとされる言語特徴および言語や方言の数は、研究者によって異なるといつてよいほど多様である。詳しくは Tomić (2004, pp.4-6) 参照。
- 2) 以下、サレント方言の例を挙げる際は、便宜上イタリア語で代用させている。
- 3) Kramer (1986, p.156)では、「不定詞の消失」は前線となる語より起こり始め、「不定詞の最後の皆は常に potere である」(l'ultimo baluardo della costruzione infinita è sempre 《potere》.) 傾向があると述べている。
- 4) サレント地方内陸部にある「グレチーア・サレンティーナ Grecia salentina」と呼ばれる 8 つの村(Calimera, Martignano, Martano, Zollino, Sternatia, Soletto, Castrignano, Corigliano)で用いられるギリシャ系方言を指す。
- 5) ただしこの場合、もう一方の節を想定しない、例えば否定命令 (Nun lu fare! (Non lo fare!)) や、義務を表す avere+不定詞 (Ce aggiu dire? (Che devo dire?)) については、別枠として考えることになる。こういった不定詞使用については今回取り上げることはできないが、極めて一般的に用いられていることだけはここに付記しておきたい。
- 6) 調査協力者は、20 代—50 代の方言話者 10 名である。出身地は、北より San Pietro Vernotico, Cavallino (2 名)、Melendugno (2 名)、Calimera (2 名)、Nardo, Maglie (2 名) である。
- 7) Maglie 出身、30 代。
- 8) potere について、明示節・非明示節ともに可能とすると言う回答が 2 名でているが、執筆者も実際に明示節が選択されている例については未見である。この事例に関しては、調査方法まで含めた再検討が必要かと思われる。
- 9) 無効回答が 1 例あった。

#### 参考文献

- 秋山余思 (1992)、「南イタリアにおけるギリシア語的統辞法」『イタリア語ことばの諸相』、イタリア書房
- 泉井久之助 (1968)、『ヨーロッパの言語』、岩波新書
- バーナード・コムリー、松本克己・山本秀樹訳 (1992)、『言語普遍性と言語類型論』、ひつ



じ書房

- Calabrese, Andrea (1984), *'Una differenza sintattica fra il salentino e l'italiano'*, in *Rivista Italiana di Dialettologia* 8, Cooperativa Libreria Editrice, Bologna
- (1992), *'The lack of infinitival clauses in Salentino: A synchronic analysis'* in *Theoretical analysis in Romance Linguistics*, John Benjamins, Amsterdam
- (1993), *'The sentential complementation of salentino: A study of a language without infinitival clauses'* in *Syntactic theory and the dialects of Italy*, Rosenberg&Sellier, Torino
- D.Joseph, Brian (1983), *The synchrony and diachrony of the balkan infinitive: A study in areal, general, and historical linguistics*, Cambridge University Press, Cambridge
- Kramer, Johannes (1986), *'Influssi greci sui dialetti italiani'* in *Elementi stranieri nei dialetti italiani (Atti del XIX Convegno del C.S.D.I. (Ivrea 17-19 ottobre 1984) 1*, Pacini, Pisa
- Miglietta, Annarita (2003), *Il parlante e l'infinito: Modalità e epistemica e deontica nel mezzogiorno fra dialetto e italiano*, Congedo Editore, Galatina
- Rohlf, Gerhard (1969), *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti III: Sintassi e formazione delle parole*, Einaudi, Torino
- (1972), *'La perdita dell'infinito nelle lingue balcaniche e nell'Italia meridionale'* in *Studi e ricerche su lingua e dialetti d'Italia*, Sansoni, Firenze
- (1980), *Calabria e Salento*, Longo Editore, Ravenna
- (1985), *'La sostituzione dell'infinito nel salento e in calabria (vogghiu cu bbegnu, vogghiu a sacciu, vogghiu mu vaju)'* in *Latinità ed ellenismo nel mezzogiorno d'Italia studi e ricerche (Dalla Magna Grecia alla Grecia italica)*, Frama Sud, Chiaravalle
- Romano, Alfredo (2001), *Lu Nanni Orcu e altri racconti salentini*, Besa Editrice, Nardò
- Sandfeld, Kristian (1930), *Linguistique balkanique: Problèmes et résultats*, Librairie C. Klincksieck, Paris
- Sobrero A, Alberto e Immacolata Tempesta (2002), *Puglia*, Editori Laterza, Roma-Bari
- Tomić, Olga Mišeska (2004), *'The Balkan Sprachbund properties: An introduction'* in *Balkan Syntax and Semantics*, John Benjamins, Amsterdam